



## 五重とは



### (1) 初重『往生記』

初重は、元祖法然上人御作の『往生記』によって伝えられます。

往生とは「往きて生まれる」と読みます。私たちお念仏の信者は、この世の命が終わったらそれでしまいではない。必ず阿弥陀如来さまのお浄土に生まれかわって、今度は変わることのない永遠の幸せを得させていただきそれを往きて生まれるというのです。

浄土宗というよりも往生浄土宗と言った方がその目的がはっきりするかもしれません。

まず、浄土宗の正しい信仰を得る人柄について詳しく教えられます。

疑の心をなくし、なまけ心を捨て、自己過信に落ち入らず、自慢高慢の心をなくす。

更に自分自身はいったいどのような人間であるかを深く考えます。

- 一、人としてはずかしくない学問や、行ないを持っているかどうか。
- 一、釈尊の教えられたことをよく理解しているかどうか。
- 一、正しい人の道を守って生活をしているかどうか。
- 一、もし悪業を犯した時も直ちに反省する心を持っているかどうか。
- 一、それ等のことは何一つ自分にはないと思ひ、愚痴愚鈍の身になって、ただ「助けたまえ阿弥陀仏」と虚心坦懐にお念仏申すことが一番に大切であること。等が次第を追って詳しく説かれます。

元祖さまは『一枚起請文』の中で、

「たとえ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」

と同じことを三回も言葉を変えて繰り返し繰り返してお教え下さいました。このことが浄土宗にはいかに大切であるかと知るべきであります。

そしてこの愚か者の私がいったいどのようなことをすれば真実の信仰者になれるのかということについて教えられるのが二重以下、三重、四重のお話です。

### (2) 二重『末代念仏授手印』

このお巻物は、浄土宗の二代さま、鎮西聖光房弁長上人の御作で不思議なお名前のお書物です。この御本が作られましたのには次のような理由があります。建暦二年正月二十五日、元祖法然上人さまが八十歳でお亡くなりになり、五年十年と経ってきますと、同じ教えを受けたはずの沢山の弟子たちの中に、種々の異説が生じてきました。長楽寺隆寛の多念義、成覚房幸西の一念義、善恵房証空の西山義、覚明房長西の諸行本願義、親鸞の一向宗等、それぞれの説を主張してゆずりません。

法然上人滅後十七年、遠く九州にあってこの事を一番心配されたのが二代さま鎮西上人です。「今、私が法然上人さまの正しい法を伝えておかなければならない」とお考えになって、肥州白河のほとりの往生院で、二十余人の弟子たちを集め、四十八日間の特別のお念仏の会を催されました。その間に、これこそ正しいお師匠さまの法であるとして、

六重(六つの重い事柄)

二十二の件数(それを分けると二十二)

五十五の法数(更に細く言えば五十五)

の事について詳しく説き示され、最後にすべて南無阿弥陀仏と申すお念仏の一行に帰することを明らかにし、間違いのない証拠にと、両手の掌で朱印を捺されて後世の者のために残されたのであります。そしてこれを『末代念仏授手印』と名付けられました。

この中には、浄土宗の行の問題が主として取り上げられ、雑行と正行に分け、さらに正行の中で一番大切なお念仏を正定業とし、他の正行はお念仏を助ける所の助業と、明快に分別されています。

そして次には、お念仏を申す人の心構え、心のおちつけ所として<安心>を説き(一)至誠心(まことごころ)(二)深心(深く信ずる心)(三)回向発願心(往生を願う心)が大切であることを教えられます。

さらに信仰者の日常生活のあり方として、<四修>=(一)敬いの心、(二)信仰は一

篤く三宝を敬え 三宝とは  
 仏、法、僧なり (聖徳太子)  
 仏.....いのちの親  
 法.....不可思議な力  
 僧.....仲間達

すじのもの、(三)毎日相続すべきこと、(四)命ある限り不退転であるべきものを、説いています。

次には、平常時のお念仏(平生の念仏)、特別な日時場所を定め心改めて申す念仏(別時の念仏)、人間最後の時のお念仏(臨終の念仏)を説き明かし、中でも平常時の毎日毎日の生活の中での念仏が一番大切であることを示します。そしてこれらの事柄は、愚か者の心には、ただたすけ給えと申す、お念仏の中に全部こめられているのです。

『一枚起請文』に仰せられました、「ただし三心四修と申すことの候は、皆 決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思 ううちにこもり候うなり」このことでもあります。

もう五重相伝もこのあたりまで進んできますと、日もなれば近くなります。お同行の方のお念仏も次第に申せるようになってきます。

入行した日は、何となく申しにくかったお念仏が、知らず知らずの間に、必ず素直に声に出せるようになってまいります。

五重相伝のお話で最も中心になりますのがこの二重であります。

## 五重のすすめ

来年 平成16年4月2日より2日間で

伝燈師 無量寺 第2世住職 秀誉俊翁  
 勸誡師 知恩院布教師 山上 光俊上人  
 教授師 福円寺 富永 秀元上人

現在 参加者を募集中です。



別紙ご案内のように1月23日に、十夜法要を勤めます。その折、布教師様によります特別回向があります。風誦文回向といいまして、とてもありがたいご回向です。初めて十夜を迎える霊位、あるいは特別に志される霊位をご回向されるとよいでしょう。ご希望の方は事前にご連絡いただきますようお願いいたします。

## お十夜の意味

### 月影や外は十夜の人通り

正岡 子規

### 門前に知る人もある十夜かな

高浜 虚子

このように多くの先人が俳句にもよんでいる十夜法要ですが、その意味とは？

浄土宗が拠り所とする「浄土三部経」の一つ「無量寿経」に

正心正意齋戒清浄一日一夜勝在無量寿国為善百歳

=正しい心と意志で一日一夜の間戒を守り、清浄であったならば、阿弥陀如来の浄土において百年間の善い行いをするよりも勝れている。

所以者何彼仏国土無為自然皆積衆善無毛髮之悪

=なぜかといえば、阿弥陀如来の浄土においては、ごく自然に善行が行われており、髪の毛ほどの些細な悪もなされていないからである。

於此修善十日十夜勝於他方諸仏国土為善千歳

=ここにおいて十日十夜の間善行をすることは、他の諸々の仏の国土において、千年間の善行を行うよりも勝れている。

所以者何他方仏国為善者多為悪者少福德自然無造悪之地

=なぜかといえば、他の仏国土には善行を行う者ばかりがあり、悪を行う者が少ないからである。したがって、そこでは自然に福德が具わり、悪を造ることのない世界だからである。と説かれている。

「無量寿経」ではその後「この世には悪を行う者が多く、苦勞を惜しまずに欲望を追求し、ともにあざむきあい、心身を痛めながら、苦を飲み、毒を食らい、仕事に追われて一時も気持ちの休まる暇がない。」と続いている。

私達は、煩惱にまみれた中で日々を送っている。ともすれば自己を見失い、他者への思いやりの心は薄れ、先祖をおろそかにしてしまいかねない。そうした中だからこそ、一日一夜でも、十日十夜でも、心身ともに正しく、清浄であるように努め、清らかな気持ちで十夜法要に参列したいものである。

浄土宗新聞より抜粋

## 位牌型の書き方について

年間の法要では位牌型にお戒名等を書いてご回向しておりますが、書き方が良く分からない方もおられるようなので、説明しておきます。

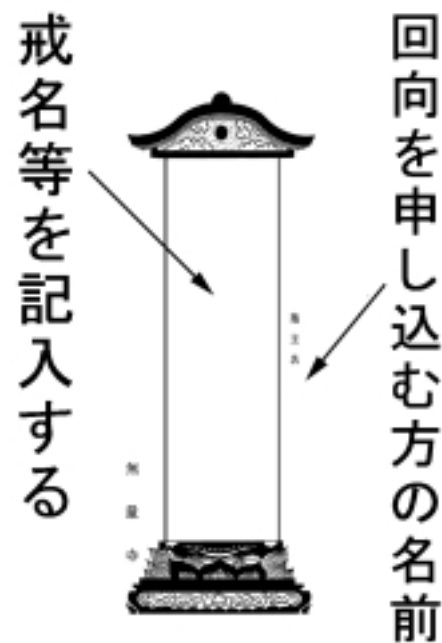
記入方法は右に示しているように記入して下さい。

お寺にご持参下さる時には、お家の仏壇からその法要で回向したい霊位のお戒名を書き写して下さい。

お戒名を覚えるためにも、是非ご自身で書いて来て下さい。

上手に書く必要はありませんが、丁寧に心を込めて写しとって下さい。

## (位牌型の書き方)



雷山観音へ参拝に行きました。お念佛講、十四日会の皆さんと一緒に前原市にある真言宗のお寺雷山千如寺へお詣りしました。



開山堂  
五百羅漢



10月13日 津軽三味線コンクールで全国第2位になった西はじめさんのコンサートが開かれました。津軽じょんがら節など三味線の音色に聞き入った一時でした。

